スタウル

かおりん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
スタウル

【Ｎコード】
Ｎ４０１８Ｚ

【作者名】
かおりん

【あらすじ】
スターフォックスのスターウルフの小説。

スターウルフ

ウルフ
「スターウルフの小説だ」

ウルル
「オリキャラがいるよぉー」

パンサー
「全国のレディ！見てくれよ！！」

アンドリュー
「アホらしい・・・」

レオン・シェリー
「「黙れ猿」」

アンドリュー
「アンドルフおじさぁぁぁぁぁぁん！！！！！」

アンジェ
「こんなものでよければどうぞ！！！」

アンジュ
「銅像ーじゃなくてどうぞー　」
ウルフ
「そういえばＢＬって何？」

シェリー
「そこからですか・・・」

ウルル
「ＢＬって何ー？」

ピグマ
「聞かんでもええで」

愛されたくて（シェアン時々ウルフ）

「ったく尋常じゃねえよあいつら」

戦闘が終わり、帰ってきたウルフ達。

「レオンー、アンドリューー、白兵戦お疲れ様ー」

「・・・ふん」

「・・・」

「お疲れ様でした」

「・・・」

「・・・？」

アンドリューの様子がおかしい。

何時もなら返事ぐらいしてるのに。

モニターごしの彼の顔は火照っているのか赤い。しかも息が荒い。

（まさか・・・）

帰ってくるとレオンとパンサーはリビングへ行ってしまった。

「・・・アンドリュー？」

「・・・」

かなり上の空。

「アンドリューーーーー！！」

「Σ！？な、何だウルフ！！？」

「お前・・・ちょっと俺の部屋に来いや」

「・・・え？」

「白兵戦の時、何かあったんだろ？」

「そ、それは・・・」

「・・・まあ、詳しくは部屋の中で聞こうか」

そう言って二人はウルフの部屋に。

バタン

「で？アパロイドとの戦闘の時、何かあったのか？」

「・・・あいつら大概が虫だろ？」

「？ああ」

「刺されたんだ。どんな毒か知らないが身体が・・・熱くて」

「もしかしたらそいつ・・・メデューアパロイドかもな・・・」

アパロイドには種類があり、ウルフはそれのほんの一部を覚えている。

「やつの出す液は媚薬の効果があって、異性との性行為じゃねぇと治らないらしい」

「そ、そんなっ！！」

「よかったじゃねぇか。シェリーとヤれるんだろ？」

「こ、こんな事にシェリーを巻き込みたくはない！！！」

「なるほど・・・だとよシェリー」

クローゼットから白い女性が現れた。

シェリーである。

「Σし、シェリー！？」

「お前の様子がおかしいって俺に言ってきたからな」

「別に構わなかったんですよ。むしろしたかったんです」

（無視された・・・）

完全にウルフをスルーしてアンドリューに歩みよる。

「・・・／／／」

唇をつけると舌を入れてかき回す。

「んっ・・・んーーーー・・・／／／」

そして少しずつ上着を脱がしていく。

二つの小さな突起に触れる。

「んぁっ・・・／／／」

手で弄ばれる。

（私って本当に男なんだろうか）

本気でそう思った瞬間だった。

どっちが男なんだか

そして突起をギュッと摘まむ。

「ああっ・・・／／／」

情けない声を出し、恥ずかしくなったアンドリューはシェリーから顔を反らした・・・が、すぐにシェリーの方を見る。

「ちょ・・・まて・・・そこはっ・・・」

シェリーの手が下半身まで伸びている。ズボンのジッパーが下ろされる音がする。覚悟して目を瞑る。シェリーが考えてたよりも大きいそれが姿をあらわした。

（俺のよりでけぇ・・・）

すっかり空気になってしまったウルフさんは思わず自分のと比べてしまった。

すでに立っているそれを親指で敏感な先端をなでるように触る。

「・・・っ・・・／／／」

身体が震える。まだ物足りない。涙目でシェリーを見る。

「今度は本気でいきますよ」

そういうとアンドリューの物を口にくわえた。

「っ！！？／／／」

さっきまでとは違う鋭い快感に頭が真っ白になって来てそして―

「あっ・・・ああーーーっ！！」

ドクリと欲をシェリーの口の中に撒き散らした。

絶頂に達するのはこれが初めてらしく、果てるアンドリュー。

シェリーはアンドリューの欲をゆっくりと飲み込んだ。

「おまっ・・・それ・・・」

「・・・苦いですけど？」

「違う！そういう事じゃなくて・・・」

「毒の事なら大丈夫ですよ。飲み込んだぐらいで感染しませんから」

「終わったかー」

「あ、ウルフ様、いたんですか」

「本当に空気だな俺・・・」

「・・・」

ぐったりして力が入らない。

こんな事初めてだった。

「・・・もしかして、自慰もしたことないんですか？」

弱々しく縦にうなずくアンドリュー。

「童貞、奪っちまったな」

「えへ」

「えへじゃねぇだろ・・・そろそろ仕事の時間だ」

「・・・そうか・・・」

「立てます？」

「無理」

「「ですよねー」」

「おいウルフ、時間だぞ」

「今いくわ！！！・・・悪いが俺達行くわ」

「・・・行きますね」

「・・・ああ」

まるで夢を見ていたかのような時間は終わりを告げた。

～完～

愛されたくて第2話（アンシェリ）

アンドリューとコーネリアで買い物をしていると偶然にもメンバー全員にあってしまった。

「貴様ここで何している」

「か、買い物に付き合ってただけだ！！」

「それって所謂デート？」

「・・・」チャキッ

「無言で武器を構えるな！（汗）」

男共が話している外でシェリーは話が終わるのを待っていると、ウルルが傍に来てこういった。

「シェリーお姉ちゃんって処女なの？」

「・・・何処でそんな言葉覚えたの？」

「ピグマおじちゃんが言ってたー」

後でピグマにはウルフの正義（！？）の鉄槌が下されるだろう。

・・・スターウルフになるまえに賞金稼ぎと共に裏稼業もやってきたが、処女である事に間違いはない。

黙っているとまたウルルが

「襲われた事ないの？」

と言ってきた。

子供（とはいっても二十歳だが）にそんな事聞かれるとは

襲った事はあるが襲われた経験はない。

「お風呂場で誘ってみたらー？アンドリュー兄ちゃんだって男だから襲ってくるかもよー」

と言って少し距離を持つ。

シェリーは空を仰いで

「・・・やってみますね」

ぽつりとそう呟いた。

今日の洗濯当番はアンドリューだ。

それを見越してウルルはああ言ったのだろうか。

どちらにしても大人の世界だ。子供が入る隙間はない。

いつもは３０分かけるバスタイムを十分で終わらせ、タオルを巻いて脱衣場で待っていた。

３分後

「洗濯物取りにキター・・・ってシェリー！？」

誘うのはシェリーの十八番だ。しかし、ウブのアンドリューに通じるのだろうか。

「アンドリューさん・・・」

ウルウルな目でアンドリューを見る。アンドリューは真っ赤になって顔を背けていたが

「・・・っ！！もう我慢できないっ！！！！！」

風呂場でシェリーを押し倒した。
シェリーは抵抗せずただアンドリューをじっと見ていた。

「・・・」

震えているアンドリューの右手を自分の胸に当てた。

「！！いい・・・のか・・・？」

「襲われるなら貴方がいいです」

巻いていたタオルを外す。

「・・・女性の裸体を見るのは初めてですか？」

「・・・／／／」

恥ずかし過ぎて言葉にできないのか首を縦に振るアンドリュー。

「じゃあ襲うのも初めてですね」

「・・・襲われた事あるのか？」
「処女ですよ私」
「！？」
「・・・気が引けますか？」
「そ、そういう事・・・じゃ・・・／／／」
「じゃあなんです・・・」
言い終わらない内に唇を防がれ、舌を入れられた。
「ふ・・・っ／／／あっ・・・／／／」
口端からは色のついた息がでる。
暫くして離すと今度は胸に手をだした。
「あん・・・っ／／／」
さっきのキスで先の突起が硬くなっている。
その突起を了承なしに吸った。
「んっ！！／／／」
舌先で弄ばされ、甘噛みをする。
そして二つの突起をギュッと摘まむ。
「ああっ・・・／／／」

次に下半身の硬くなった場所を指で刺激する。

「ひゃあっ／／／はぁっ／／／」

既に下はぐしょ濡れだった。

「・・・なあ、もう・・・いれてもいいか？」

「え・・・」

素早くズボンと下着を脱ぎ捨てると前に見たあのデカイアンドリュー自身が姿をあらわした。

こんなにデカイ物が自分の中に入るのかと思うと胸が高鳴ってしまう。

「入る・・・かな」

そういうシェリーは何時もの敬語口調ではなくなっていた。

「・・・いれるけど、痛かったら言えよ」

コクリとうなずくシェリー。

ゆっくりと入れていく。

「んーーーー・・・／／／」

焦らしてんですかーと言いたいほどゆっくりと入ってきた。

「・・・締め付けるなこれは／／／」

処女膜が破れ、血がでる。

「はぁっ・・・／／／」

そして根本と根本が付くと腰を降り始めた。

「あっあっ・・・／／／」

アンドリューの手首をきつく握る。

「あ・・・アンドリュー・・・さんっ／／／」

「・・・何？」

「・・・大好き・・・ですっ・・・」

「・・・っ！！／／／」

思いがけない告白に思わず言葉を失った。

「・・・私もだ」

そして今度はシェリーの方から口づけをした。

「んあっ／／／はぁっ・・・イキそう／／／」

「っ！！わ、私もだ・・・／／／」

「お願いっ／／／中に出して・・・っ／／／」

そして

「「ああ・・・ーーーーっ！！／／／」」

二人同時にイった。

「・・・アンドリューさん」

「・・・何？」

「大好きですっ！」

「・・・ああ、私もお前が好きだ・・・」

そしてまた口づける。

「「愛してる」」

二人同時にそう呟いて。

「とりあえず、服着ようか」

「・・・はい」

その後、二時間も寒い風呂場に居たため、二人とも風邪をひくのは言うまでもない。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4018z/

スタウル

2011年12月16日19時50分発行